

---

# 碧のリリーフ

蒼井七海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

碧のリリーフ

### 【Nコード】

N3925BA

### 【作者名】

蒼井七海

### 【あらすじ】

今、このレオ・ミルス王国には、人間と動物の影に隠れて、ひっそりと幻獣が暮らしている。  
そんな中、進み続ける少年がいた。  
そんな中、友を捜す少女がいた。  
二人の旅路が交わる時、運命は動き出す

## プロローグ 混血の王（前書き）

始めてしまったオリジナル小説。

プロローグは短めです。よろしくお願いします。

ちなみにハンドルネームはサイトで使っている物です。

おかしなところをちょいっと修正。

## プロローグ 混血の王

二十年くらい前の話だ。

かつてその国には、人間やごく普通の動物以外にも、“幻獣”と呼ばれる特殊な種族がいた。

彼らは魔力を持っており、なかには人間に化けることが出来る者もいた。その者達は、町へ出て人間と交流を重ねて、ほかの幻獣達に土産話を聞かせたりしていた。

中には、人間と交わって子を成す者まで出てきていた。

いろいろと話は聞くが、とにかくわかることは

彼らは、人間が大好きだった。

彼らは、争いが嫌いだった。

このふたつのことだった。だから彼らは、人間と争うようなことにならぬよう、積極的に人間と交流を重ねようとしていた。

だが、人間は。

交流を重ねていくにつれ幻獣のいいところだけでなく、恐ろしいところも知ってしまった。

彼らの中にある膨大な魔力。彼らの恐るべき身体能力。そして、人間と積極的に関わろうとするその姿さえ、人間側には悪いように映ってしまった。

交流が深まっていくにつれ、人間達は陰で幻獣を滅ぼす策を立てるようになってしまった。

そして、ついに。

人間が動き出す。

王国軍から特殊部隊を派遣し、その国の人間は幻獣を、その仲間を、狩った。そして、町の近くに住んでいた幻獣の大部分が姿を消した。

この出来事は後に、『幻獣狩り』と呼ばれることになる。

その『幻獣狩り』から約五年後。

レオ・ミルス王国の王都たる町、ミルス市。その郊外にある建物で

運命は、動き出そうとしていた。

『ホギヤー、ホギヤー……』

薄暗い、静かな建物の中に赤子の泣き声が響き渡る。

赤子を抱いているのは、一人の女だった。黒い髪を真つすぐ伸ばし、一房後ろで縛っている女。どうやら、赤子の母らしい。

赤子は彼女の胸に抱かれていた。

そしてその横にいるのは、まだ見たため年若い男だった。

「そいつの名前……なんにする？」

男が口を開く。女はそれに小さく答えた。

「そうね……あなたが前々から考えていたのがいいかもしれないわ、キルス」

「……………」

男　キルスはにっこりとほほ笑んだ。

こうしているとただの穏やかな父だった。しかし

「キルス」。

その名を聞けば、ほんの三年ほど前の世界を生きている人々は震えあがるだろう。

『“混血の王”が現れた』

そう、言うて。

## プロローグ 混血の王（後書き）

“混血の王”

この単語は重要です。ちらちらと出てきます。

人名って悩みませんか？（え

また、次回も宜しくお願いします。

## 第一話 魔法士のいる町(1) (前書き)

さて、始まりました第一話。

第一章に分類される話の「第一篇」という感じですが。

第一章は全三篇で構成されています。

ちなみに今回は「スクロールだと読む気が失せる」という姉の言葉を参考に、長い長い一話を幾つかにわけてみました。どうでしょうか？



## 第一話 魔法士のいる町（1）

町にわずかながら残っていた雪もすっかりとけ、季節は春を迎えようとしていた。

もつとも、寒さが和らぐ気配はまだなく、それはまだ少し遠いところかもしれないが。

大陸の海沿いに位置する、緑多いレオ・ミルス王国。その王国の片隅で、ことは動き出そうとしていた。

レオ・ミルス東部の町、フェーン。王都へ行く者達の進路上にあるこの町は、他に比べて比較的人が多く、いつも活気に満ちあふれている。それに加えてここ最近、春が近いせいか気温もだいぶ上がってきている。そのため、観光客は増える一方だ。

ただ、その観光客に混じって、時々王都やその周辺を目指す“旅人”もやってくる。その旅人が利用するのは、だいたい宿屋と酒場（と時には情報屋）くらいで非常に偏っているのでわかりやすい。後は、その辺で露店をやっている商人から必需品を買うこともある。まあ、いずれにせよ客が増えることに変わりはないので、商人にしてみれば、誰であろうと構わないのだが。

しかし、だ。たまには、こんな風変わりな旅人もいる。

町の小さな飲食店。その、カウンター席の一番端に座っている少年は、ふと、思い出したように口を開いた。

「なあ、おじさん。あの模様、何？」

その時、忙しなくカウンターを動きまわっていた店主の動きがぴたりと止まる。そして振り向いて、少年にこう質問を返した。

「……君。お母さんやお父さんは、どこにいるんだい？」

すると少年は、飲んでいたお茶を盛大に吹きだした。ストローを

通してだったので被害は少なくて済んだが。

「あのな！ オレ、一応旅人なんだぞ！！」

「はあ、君みたいなのが。今いくつ？」

「十五！！」

半信半疑に訊いてくる店主に、はつきりと言葉を返す少年。薄く金色のかかったこげ茶の瞳が、なぜかららんと輝いていた。

ただし、答えたとたんに二人の間に沈黙が落ちた。そして、その沈黙の後……

「……十五なのに、王国内を転々と旅かい。ご苦労様」

「待て　　い！　それ以前に“こいつ本当に十五か？”とか思ってるんだろ！？」

「だって信じられないんだもん」

少年は言葉に詰まる。店主がそう言うのも無理はない、と思っ  
ているからだ。

背が少し低い、というのもあるが……おそらく彼は同年代の中で  
はとりわけ童顔なのだろう。口調などで判断しなければ、場合に  
よっては十一位に思われることもあるかもしれない。

あと、一応これは彼のコンプレックスである。

少年の様子からそれを察したのか、店主が話題を変えてきた。

「で、なんのために旅なんてしているんだ？」

「んー。まあ、なんとなく？」

「なんとなくって……」

店主はやや呆れたようにそう突っ込んだ。今の時代は、このミル  
スを「なんとなく」旅するものなどいないと思っていたから。

理由を簡単に言うと、そう……「昔より物騒になったから」であ  
る。それこそ凄腕の物好きならいるのかもしれないが、そこまでに  
ならないと「なんとなく」旅はできるものではない。今のレオ・ミ  
ルス王国はそんな国だ。

店主が悶々と考え込んでいると、ふいに少年が口を開いた。

「ところでさー。さっきから聞きたかつたんだけど」

「ん？」

それに気付いた店主が顔を上げると、少年が店の壁を指さす。そこには、円を中心とした図形と、不思議な文字で構成されている模様があった。

「あの模様、何？」

店主は「ああ」と言い、一言で説明した。

「魔法円だよ」

魔法円とは、古き時代に人間が生み出したといわれる力、“魔法”を行使するために用いる円だ。一般的にはこれがないと、魔法は行使できないものとされている。しかし、あくまでも魔法円は「人間が魔法を使う時“基本的には”必要になる道具のような物」である。

そのため、中には魔法円を必要としない魔法士もいるというわけだ。

しかし、それなら少年もよく知っていることである。“あれ”が魔法円だということも、はっきり言ってみればわかる。

それをわざわざ一言言ったが説明してきたのが妙に癪に障かんつたらしく、彼は顔をしかめて言いかえした。

「あのなあ……それは見りゃわかるよ。オレが聞きたいのは、なんでその魔法円がこんな普通の店の中にあるのかってことなんだけど？」

すると店主は、急に嬉しそうに笑って話し出した。

「この店に魔法士様がいらっしやっつてな。そのときに「魔よけになるから」とわざわざ描いてくださったんだよ」

「魔法士？ いるのか、この町に？」

少年は思わず身を乗り出して聞いた。魔法士 分かりやすく言えば“魔法使い”。そんな奴が、こんな町にいるなんて。

だが、そんな少年の明らかな態度の変化に気付くことなく、店主は言葉を紡いだ。

「ああ。十五年前、くらいだったかな。“ある事件”の後にふらっ

とやってきて、当時は寂れていたこの町を、あっという間に復興してくれたのさ。魔法の力で」

そこまで聞いて、少年は顔をしかめた。

何かが引っ掛かる。

（十五年前。オレの生まれた年……。ある事件の後、だって？）

少年が心の内で呟いた時、ドアチャイムが軽やかな音色を奏でた。

**第一話 魔法士のいる町(2) (前書き)**

今回から少し長くなります。

## 第一話 魔法士のいる町(2)

「こんにちはー！」

「今日も来たよー！」

そんなことを言っただけで店にひょっこり顔を出してきたのは、栗色の髪に黒い眼の、少年と少女だった。少女の方が若干年上に見える。どうやら、姉弟のようだ。

「おや、ティナにケヴィンじゃないか。今日は若いのがよく来る日だなあ」

少年はやたらと遠距離間で行われている会話を聞きながら、ふむふむ、とうなずいている。

あの、オレよりいくつか下のジョーちゃんがティナで、十も言っていないようなガキンちょがケヴィン、か。

入口にいる姉弟の名前を、頭に叩き込んでいる最中だった。

だが、そうこうしているうちに基本的な挨拶は終わったらしい。ティナがケヴィンの手を引っ張って、カウンターの方まで走っていく。

「おじさん、おじさん！ 今日のみかんとりんごください！」

「くださいー！」

姉のティナが店主に向かって注文をする。それを真似するようにケヴィンも続けて言った。その姿は微笑ましいかぎりである。

店主は「あいよ」と他の客の時と変わらない言葉を柔らかさのある声で返すと、カウンターの下をこそそこそとあさりだした。

その様子を、弟のケヴィンはカウンターにしがみつくような姿勢でのぞいている。ティナもそれを見て笑っていたが、やがて隣にいる少年の存在に気付いた。

首を傾げて遠慮がちに尋ねる。

「……町では、見ない格好だけど………」

「ん？」

少年は突然声をかけられたせいか、素っ頓狂な声を上げた。そんな彼の代わりに、未だカウンターの下をあさり続けている店主が答えた。

「あー、旅人さんだとさ。『なんとなく』旅をしているんだと」

「うわ。余計なことさらっと口走りやがって」

『へー』

不機嫌そうな少年をよそに、姉弟は揃って言う。感情がいまいち読み取れない声音だった。

ただ、その後。弟はそれで終わったが、姉のティナの方は彼に興味が出たらしく、思わぬことを尋ねてきた。

「あの、お名前……」

「へ？」

「お名前は、なんというんですか？」

また唐突に聞いてくるな、といわんばかりの顔で少年はがりがりと言を聞いた。そして少しためらってから、小さな声で一言。

「……………レン」

なぜか非常にためらっていた少年ことレン。あまり気に入っていない名前なのか、相手の反応が気になるのか。次のやり取りで、その理由は案外あっさり明かされる

ティナは彼の小さな声を聞き取り、何度か小声で名前を繰り返す。やがて、瞳をぱつと輝かせた。

「レンさん、というのですね！ 私はティナ、こっちは弟のケヴィンです！ よろしくお願いしますっ」

「へ？ あ、ああ。よろしく」

名前を名乗り終えてようやく落ち着いたところだったのに、レンはまた戸惑ってしまう。

なぜ、相手が名前を名乗っただけでそこまで嬉しそうにするのか。

彼にはまるで理由が分からなかった。

レンが密かに唸っている一方で、ティナはケヴィンに「あんたも挨拶くらいしなよー」と言っていた。それに「はあい」と答えたケヴィンは、レンの方を向く。彼の方も流石に気付いたらしく、視線をそちらにやった。

「よろしくおねがいます」

「おう、よろしくな」

ぺこりと頭を下げてくるケヴィンに対し、気安く応じるレン。どうやら、人と言葉を交わすのに慣れてきたようだ。

和やかなやり取りが行われていたその時。いつのまにかりんごのみかんを用意した店主が、袋を姉弟に差し出してきた。

「はい、これ。ご注文の品だよ。それぞれ三個ずつで二二五メルクね」

「あ……はい！」

ティナは慌てて、ポケットの中から小銭を取り出す。店主はそれを受け取って確認すると「毎度あり」と言った。そして、なぜかにやりと笑う。

「そうだ。お二人さんが喜びそうな情報があるんだ」

その視線が魔法円に注がれていたせいか、レンにはだいたい察しがついていた。

ほほう、と言って身を乗り出す姉弟に、店主はレンが予想した通りの言葉を述べる。

「この旅人さん、あの壁の魔法円に興味を示したんだ。もしかしたら、これを描いていた魔法士にも興味を持つかも……」

「……………」

レンは何も言わずに目を逸らし、誰にも聞こえないような小さなため息を漏らした。予想通り過ぎて呆れた、と言ったところか。

しかし彼とは対照的に、大喜びしていたのがちびっこ二人。もう、目がさつきまでとは比べ物にならないくらい光り輝いていた。



「え！？ それじゃあ、もしかしたら仲間になってくれるってことですか！？」

「いや、そこまではなんともいえないけどな」

店主が困ったように頭をかくが、姉弟の勢いは止まらない。テナに続いて、ケヴィンが純粋な喜びを顔いっぱい広げて言う。

「これでしようのいいところが旅人さんにも伝わるね！」

そのやりとりをただ黙って聞いていたレンだが、ある言葉にふと違和感を覚えて、思わず話に割り込んだ。

「……師匠、って言ったか、今？」

彼の言葉に反応した店主が、まっさきに彼の方を向いて話し始める。この中では、完全に説明役に回っている店主だった。

「ああ、いや。こいつらね。昔その魔法士さんに助けられたことがあったんだ。そのことに関してずっと恩義を感じ、憧れを抱いていたみたいなんだ。」

それで『自分達もあの人みたいな立派な魔法士さんになるんだ！』って言うって、三年くらい前に弟子入りのよ。さっきこいつらが買った果物は、多分魔法修行の時の間食だ」

「三年。ふうん」

呟いて、レンは姉弟を見やる。

「……おまえら、さ。三年修行してどこまで教えてもらったわけ」

あえて平坦な声音で、二人にそう尋ねる。すると彼らは、また嬉しそうな声を上げて、

「あのね！ 魔法は精霊さんの力があるから使えるとか、精霊さんのぞくせいとか……」

「と、魔法円の仕組みや魔法の実践もしましたよ？」

と答えた。姉弟は嬉しそうな上にどこか得意気な表情までしているし、店主はそれをみて微笑ましそうにしていたが……レンは、まったく逆の表情になった。

「マジか？」

と、彼が問い姉弟がうなずくと、たちまち眉間にしわが寄る。周りの人達が訝しげにしているが、レンは構わず頭を抱えた。そして、誰に対して言うでもなく、独り言としてこう呟いたのだ。

「三年習って基礎中の基礎とか、あり得ねえだろ……」

思わぬ返答に、周りの三人はしばし言葉を失っていた。

「あー……っと。念のため聞いておくが、おまえら、どんなところまでやったんだ？……具体的に」

レンは憂鬱そうにティナに聞いた。

「えーと……」

ティナは、腕を組んで少し考える。

三人は今、店の外にいた。

あの後、レンの眩きが原因でティナとケヴィンが「じゃあ教えてよー」と、レンにくつついて離れなかつたので、仕方なく魔法講座を開講することにした。プロ……といえるほどではないが、レンも一応魔法士である。ある程度は教えられるだろう。

しばらく考えていたティナは、やがてゆっくりと話し始めた。

「えー……と。まずこの世の魔法の源は、精霊 または 気 ともいう である、って習いました。あと次は精霊の属性。魔法を使う地形によっても変わるらしいですけど、基本は火地風水って聞きました。後は魔法の実践……です」

「うむ。魔法円の仕組みもやったとさっき聞いたが、あれはまあ……後でいいか」

言いながらレンは、何かがおかしい、と感じていた。もちろんだいたいは彼らが習った通りなのだが、妙に違和感がある。

とりあえず、近くの太めの木の枝を手に取った。そして、地面に簡単な絵を描き始める。ティナとケヴィンが覗き込んできたが、気にせず描き続ける。

そして描き終わると、説明を始めた。

「そうだな。“この世の魔法の源は精霊”……これは習ったんだよな？ それじゃあ一応精霊のことから解説するぞ。

精霊は、霊気とかそういうモンの塊でできた生命体で、大体なんにでもこいつが宿っているといわれる。火にも、水にも、風にも……人にも、な。で、そいつらとうまく付き合うことで人は魔法を使えるようになる」

そこまで話したところで、ケヴィンが口を挟んできた。

「うまくつきあうって……仲良くなるってこと？」

「まあ、簡単に言えばそういうことかね。ちよつと違うけど……」

とりあえず質問には答えておいて、レンはそのまま言葉を続けた。「じゃあ次は、その辺のことについて話しておくな。知ってると思うけど。」

さつき、精霊とうまく付き合うことで人は魔法を使えるようになる、って言ったよな？」

「はい！」

ティナが元気よく答えた。レンも、無言で首を縦に振る。

「簡単に言えばその通りだ。だけど実際はちよつと複雑で……人が魔法を使うには、まず自分の中の精霊をうまくコントロールできるようにしなけりゃいけない。」

それができたら、自分の中の精霊を使って自然界の精霊たちに干渉

つまり、奴らの世界に入り込むこと、と思ってもらえばいいをして、彼らに自分の存在を認めてもらうんだ。

で、認めてもらえたら、必要な時に自分の中の精霊の力を使って外の精霊を呼びだして、その力を自分の中に取り込む　と。ここまではして、初めて人は“魔法”って呼ばれる力を使うことができるわけだ」

「あのお」

そこまで話した時、ティナが今までとは明らかに違う態度で、話に入ってきた。

「うん？」

「私達、その精霊への干渉のところとか、ちつとも習っていません」

それを聞いた瞬間、レンは固まった。

「ま……じ……？」

「本当ですよ。ねえ、ケヴィン？」

ティナが、隣にいるケヴィンを見る。彼も大きくうなずいていた。それを知って、レンは本気で頭を抱えそうになった。だが、同時に納得していた。

最初にティナの話聞いた時に感じた違和感は、これだったのだ、と。

精霊との干渉は、魔法を使う前段階で、絶対にしておかなければならないことのひとつだ。人はみな、精霊の許しなしで魔法を使うことはできない。もし、それをやってしまえば魔法の暴走も起こしかねないのだ。

（だけど、こいつらは実践をした、と言った。どうせ子供だまし程度のもんだろっが。

でも、それでも　　）

危険すぎる。

レンは、木の枝をその辺に転がして立ち上がった。

ティナとケヴィンが訝しげに彼を見る。

「……レンさん？」

「どうしたのー？」

問いかけてくる二人を無言で見つめ、レンは言った。

「今、おまえらの師匠とやらに会うことはできるか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3925ba/>

---

碧のリリーフ

2012年1月11日07時46分発行